

「順境の日、逆境の日」

伝道者の書 7 : 13 - 14

January.3.2021

伝道者の書 7 : 13 - 14

Preface

元旦礼拝に出席できなかった方々もおられると思いますので、もう一度、壁に書けられた今年の主題聖句を、皆で読んでみたいと思います。

(オンラインの方々は、画面に出る御言葉を読んでみてください。)

神のみわざに目を留めよ。順境の日には幸いを味わい、逆境の日にはよく考えよ。これもあれも、神のなさること。(パウロ)

2021年の主題聖句をどうしようか悩みながら祈っているうちに、この伝道者の書 7 : 13 - 14 の御言葉が、私の心を驚づかみにしました。

なぜ心を驚づかみにされ、迫って来たのかについては、元旦礼拝の時に話しましたので詳しくは繰り返しません、ギュッと絞って短くまとめますと、

「物事が曲がったと思った時にこそ、神の恵みを思い起こしなさい。物事が曲がったと感じた時にこそ、そこに神の意図を見出すことを諦めてはなりません」という内容でした。

今朝は、この「神が曲げたものを、だれがまっすぐにできるだろうか」という御言葉に合わせて、「順境の日には幸いを味わい、逆境の日にはよく考えよ」という御言葉について、考えていきたいと思っています。

(元旦礼拝のメッセージをまだお聞きになっておられない方は、ぜひ、ホームページに入ってお聞きになってみてください。)

Part One

まず、使徒パウロの言葉を見てみたいと思います。

コリント人への手紙第二 12 : 7 - 9 (パウロ)

使徒パウロには生涯に渡って、一つの大きな痛みがありました。

それは肉体的な痛みであり、病です。

その病をパウロは、「私を打つためのサタンの使い」と表現するしかない程に苦しいものでした。

ただ、その病が何だったのか、正確には分かっていません。

学者たちは、癩癩だったのではないだろうかと推測しますが、はっきりとは分か

りません。

ただもし癲癇だったならば、日常生活を送るのに、また特に、当時福音を宣べ伝える伝道者として生きるパウロにとっては、大きな障がいであり、深刻な問題でした。

皆さん想像してみてください。

「イエス・キリストを信じて、救いに与ってください！ 神の御言葉こそ力です！ イエス・キリストこそ道であり、真理であり、いのちです！」と堂々と宣言し、福音を宣べ伝えているのに、突然癲癇の発作が起きて、意識が無くなり一点を見つめたまま動かなくなったり、その場に倒れたり、痙攣が起こったり、時には口から泡を吹いたり、また時には、今さっきまで神の愛について語っていたのに、発作のため全く意図していないにもかかわらず、無意識の内に人に向かい攻めかかって行ってしまうようなことが起こったとしたら、どうなるでしょう？

2000年前の背景を考えますと、「救いだ、栄光だ、道だ、真理だと言っている前に、まず自分の病気を何とかしろ！」とか、中には「悪霊付きだ！」なんて言う人たちもいたことでしょう。

2000年前当時の人前に立って話す福音伝道者であったパウロにとっては、正に、「私を打つためのサタンの使い」という強烈でどぎつい表現までせざるを得ない深刻な問題だったでしょう。

そして、パウロは神様に、その病を取り除いてくださるよう三度祈りました。

三度祈ったというのは、300回祈っても足りないぐらいなのに、三度しか祈らなかったということではなく、この問題を解決していただくために何度も切実に祈ったということです。

どれくらいの期間祈ったのかはわかりません。

ただひたすらに、切実に祈っていましたら、神様がその祈りの応答を与えてくださいました。

その祈りの応答は至って明確で、至って簡略なものです。

「そのまま、生きなさい。わたしの恵みはあなたに十分である」というものでした。

即ち、「その病は、私があなたに施した恵みである」ということです。

さらにこう付け加えます。

「その弱さこそ、神の力の完全な現れである」と。

「いやいや、ちょっと待ってください。病を取り除き、癒してくださることこそ恵みなんじゃないですか！？そのまま生きなさいって何ですか？こんな痛みが神の完全な力の現れって何なんですか？」となりませんか？

冗談にも程があると、なりませんか？

でも、私たち信仰者、皆こういう経験をしながら生かされています。

与えてくださいと何年も祈り続けているのに、一向に与えられる気配もなく、一生懸命に御言葉にすがって生きようと努めているつもりなのに、その熱心が人を躓かせることもあれば、自分も躓いてしまうこともある。

体の痛み、心の痛み、生い立ちの痛みを取り除いてくださいと祈るのに、「その痛みこそわたしの恵みだ」と説得されながら信仰生活を生きています。

まさに、私たち信仰者は「神が曲げたものを、だれがまっすぐにできるだろうか。神のみわざに目を留めよ。」という神の語り掛けに日々説得されながら、神の前に降伏し、神の前に降伏する幸福を味わわせられながら、信仰の道を生かされています。

一見すると恵みに思えないものが、二つとない神の恵みだったりすることが、常です。

神のお与えになる恵みは、表面的な事象で終わることはありません。

神の恵みは奥深くで、深淵で、一見しても分からないことの方がはるかに多いのが事実です。

もちろん、分かりやすい恵みも日々お与えくださっておりますが、一見すると判断するのに困難な、曲げられたとしか思えないような先に、神の御力の完全な現れという真の恵みをお与えくださいます。

パウロの肉体のとげも、正に、奥深い恵みでした。

“高慢にならない”という人の力ではどうすることも出来ない恵みを施すための恵みが、自分の力ではどうすることも出来ない肉体のとげでした。

私たちの考える恵みは、五体満足、順風満帆、万事順調（バッチグー）のような外見に現れるものを望みますが、

神様がお与えなさる恵みは、五体不満足、天歩艱難、阿鼻叫喚というような逆境の状態の中で練られる内なる品性です。

寛容だったり、親切だったり、柔和だったり、自制だったり、愛、喜び、平安のようなものです。

その奥深い恵みをお与えなさるために、とげなる状態を土壌としてお用いになるわけです。

出来れば、とげなんか用いないで欲しいと、私たちは単純に思ってしまいますが、

闇多き私たちは、とげが無いと、高慢になり、自分を誇り、人を蔑み、人を見下げ、目の前にある刺激ばかりを追い、争い、奪う者であるため、

唯一とげを御霊の実りに造りかえることの出来る父なる神様は、とげを用いなさいます。

この実りにおいては、誰も誇ることも出来ません。

「いい教養が、いい経験が、私の努力が、私に備わった条件が素晴らしくて、この実を得ることが出来たなんて」いう、自分自身を誇るほんの少しの隙さえも与えないほどのとげを用いなさいます。

ただただ、それはすべて神のなさった業であり、恵みだとしか表現できないとげを用いて、実りへとお導きなさいます。

だから、順境の日には感謝をもって幸いを味わい、逆境の日にはよく考えるのです。

Part Two

聖書の中には、パウロのみならず、一見すると判断するのに困難な、曲げられた先にある、神の御力の完全な現れという真の恵みを体験している人が、たくさん登場してきます。

その内の一人であるヨセフについては、こう記しています。

詩篇105篇に行ってみましょう。

詩篇105：17－18（パワポ）

ヨセフはその人生に、不当で、不条理で、全く理に適っていない、ねじ曲げられ方を経験しました。

父から愛されただけなのに、兄たちに妬まれ、疎まれ、嫌われ、

神様が夢の中で示してくださった啓示を正直に兄たちに話をしただけなのに、兄たちの怒りを買ひ、

遠くで羊の群れを世話している兄たちの安否を気遣った父ヤコブに頼まれて、お使いに行っただけなのに、兄たちにボコボコにされ、深い穴に投げ込まれ、奴隷として売り飛ばされ、獣に引き裂かれて死んでしまったと言われてしまいました。

父のお使いに行っただけなのに、どんなに頭をひねって考えても、全くもって納得も行かなければ、理解することも出来ない不当で、不条理な目に合っていました。

もちろんヨセフには、皆さんもご存知の通り、兄たちを逆なでするような浅はかなところがありました。

奴隷として売り飛ばされ、死んだ者として扱われることが正当化される程のことではありません。

奴隷として売り飛ばされた当初は、奴隷として奴隷なりに成功しているような道を歩んでいましたが、今度は、主人の妻に言い寄られたことを当然のように断っただけなのに、牢獄に入れられてしまいます。

ひと月やふた月ではありません。何年もです。

しかも、その時のことを何て聖書は行っているかと言いますと、「主なる神がともにおられた」と言います。

神がともにいてくださって、ボコボコにされ
神がともにいてくださって、深い穴に入れられ、
神がともにいてくださって、奴隷として売り飛ばされ、
神がともにいてくださって、獣に引き裂かれて死んだと報告され、
神がともにいてくださって、牢獄にぶち込まれました。

到底理解に苦しみます。

でも、そうなんです。

神がともにいてくださったからこそなんです。

ヨセフの歩みを見ますと、クリスチャンとして生きていくことは、並大抵のことではないと思えてきます。

誤解を恐れずにちょっと極端に言いますと、そもそも、クリスチャンは、なりたくてなれるものではありません。

クリスチャンになるためには、信仰告白という行為が必ず伴いますが、その行為さえも、神の御手の中になって行われることです。

つまりクリスチャンは、神様自らがともにいるとお決めになり、お選びになった人が、クリスチャンとして歩める特権を与えられます。

特権と言いましても、人の目から見たら、最悪の、どん底の、崖っぷちかもしれません。

でもそんなところを、神がともに歩んでくださる特権に与っているのが、クリスチャンです。

そして、人知を遥かに超えたキリストの愛を知り、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされ、キリストの満ち満ちた身丈にまで成長させられるのが、クリスチャンです。

寛容、親切、柔和、自制、愛、喜び、平安のような人の力ではどうすることも出来ないけれども、

神のかたちに造られた人が、人として、本来備わっていなければならない（一度は罪ゆえに失ってしまったけれども）、その本来備わっていなければならない霊的品性の回復が約束されているのが、クリスチャンです。

だからと言って、クリスチャンたち皆が、いつも笑顔にあふれ、いつも喜んでいて、その人生にいつも納得が出来ているわけではありません。

ヨセフだって当然、「何で、自分の身にこんなことが降りかかるのか!？」と、苦悶しました。

「いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい、すべてのことにおいて感謝しなさい」という御言葉がありますが、「やせ我慢して、明るいクリスチャンを演じなさい」ということではありません。

「大いに訴え、大いに呻き、大いに悲しみ、大いに打ちのめされ、大いに痛んでも、その先には、決してなくなることのない喜びがあり、栄光の神との交わりがあり、何よりも苦悶さえも感謝に変えられる道を私たちは生かされているんだ」ということです。

だから、「あの人はクリスチャンなのに、何で喜ばないで、いつもあんな沈んだような顔をしているの?」とか、「祈らないの?」とか、「感謝が見られない!」なんていう思いで、人を裁いたり、不必要に自分を責めるならば、それは本末転倒であり、全くもって御言葉と逆のことをしていることになってしまいます。

“しなければならない”ということではなく、“七転八倒しながらも、栄光の神の恵みのうちに歩ませていただく特権に与っている”ということなのです。

だから、伝道者の書 7 : 14 の

伝道者の書 7 : 14 (パワポ)

順境の日には幸いを味わい、逆境の日にはよく考えよ。

これもあれも、神のなさること。

という言葉が、至極、的を得ている言葉なんです。

正直、クリスチャンの道は、何が正しくて何が間違っているのか、何が益で何が益じゃないのかは、私たちの理解では測れないところが、大いにあります。

だから、「浅はかに人を裁いてはいけない」と、イエス様がおっしゃるわけです。

クリスチャン誰もが、神の子に相応しく変えられる聖化・栄化の過程にあります。

私たちが出来ることは、喜び、楽しみ、笑顔になれる時に、思いつき喜び、思いつき楽しみ、思いつき笑うことと、

苦しくて、辛くて、痛い時には、正直に苦悶して、そこにも神の業が成されているということを頭の片隅でもいいので覚えていくことです。

ヨセフも、当然苦悶しました。

でも、苦しみの中でも、上手く行っている時は喜びました。

束の間の喜びであったとしても、しっかりと喜びました。

そして、結果的に、苦しんだ先にある神の御言葉の成就を体験するんです。

詩篇 105 : 19 からの御言葉を見てみましょう。

詩篇 105 : 19 - 24 (パワポ)

ヨセフの不当で、不条理で、理解し難い歩みの中に、着々と、一見すると判断するのに困難な、曲げられた先にある、神の御力の完全な現れという真の恵みが、しっかりと進んでいました。

そして、恵みが実現しました。

神のなさることは、深くて、深淵です。

私たちは望まない方法かもしれませんが、神様は、

弱さを知って弱きを愛す、獣のような自分を知って獣のような他者を愛す、裏切りを知って裏切る者を赦す、欠乏を知って分け合う温もりを感謝する、争いを知って和解に与る、というような深い御霊の実のような恵みをお与えくださる

のが、私たちが信じる三位一体なる神様です。

こんな深いこと、誰がお出来になりますか？

こんな深いことを成し遂げることの出来る神々が、他に存在しますか？

だからもう一度、伝道者の書 7 : 14。

伝道者の書 7 : 14 (パワポ)

順境の日には幸いを味わい、逆境の日にはよく考えよ。

これもあれも、神のなさること。

なんです。

だから、私たちは、今という現実や時から目を逸らさず、見据えることが出来るようになるんです。

Part Three

私にはクリスチャンになって、ひとつ無くなった癖があります。

それは、「ドラえもんの四次元ポケットがあつたらいいのになあ」という妄想癖です。

「ドラえもんの四次元ポケットさえあれば、この状況を何とかできるのに！」と、四次元ポケットが実在するかのように、常日頃、心底願っていたように思います。

目の前にある現実を見据えることが出来ずに、人の作ったファンタジーの世界に逃げ込むことが、あたかも現実であるかのように思っていました。

でも、これが不思議なことに、主イエス様に出会ってから、四次元ポケットは現実ではなく幻で、主イエス様こそ現実で、主イエス様に繋がって神の国に入ることこそ現実だと思えるようになりました。

神の国という現実を知ってから、「今という現実と時をしっかりと見据えなくては」と、思えるようになりました。

また、神の国という現実を知ると、「世の中にあることが、うすらぼけたことだらけだ」ということが、見えてくるようになってきました。

もちろん、世の中のことを単に卑下したり、馬鹿にしているということではなくて、「世の中のこと何一つとっても、究極的な目的になり得るものなど無い」ということが見えてきてしまったということです。

ヨハネの福音書 14 : 6 に、

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。(パワポ)

というイエス様の言葉がありますが、ここに出てくる“真理”と訳された言葉は、ギリシャ語で ἀλήθεια という言葉ですが、この言葉は、“真理”という訳し方意外に、“現実”とか“実体”という言葉でも訳すことの出来る言葉なんです。

つまり、主イエス様こそ、“現実”であり、“実体”なんです。

目に見えるこの現実世界が、現実ではなく、主イエスこそ、現実であり実体なんです。

現実であられる主イエス様を知らない限り、現実を知ったことにはなりません。

目に見えるこの現実世界こそ実体だと思わされていますが、主イエス様という真の実体であり現実なる方を認識できないこの目に見える世界は、おぼろげで、おぼつかなくて、不明瞭です。

主イエス様を知って初めて、これもあれも神のなさることだという現実が見えてきます。

主イエス様を知って初めて、今という時と現実を、主の御手の中にあって見据えようという霊的洞察力と覚悟が与えられます。

Part Four

日本には古くから、占いが、人々の生活の一部のように定着してきましたが、この占い、どこの国に行ってもあります。

では、何で占いがあると思います？

不安だからです。

何で不安なのでしょう？

主イエス様という現実で実体なるお方を知らず、今という現実に向き合うことが出来ないから不安なんです。

で、この占いですが、聖書では、悪霊の仕業であり人の金稼ぎの道具でしかないと言い切っていますが、人々の心を惹きつけて止みません。

なぜならば、おぼろげで、おぼつかなくて、不明瞭なこの世界にあって、占いは一定の未来・先行きを示しているように見えるからです。

結婚はいつ？ この事業は上手く行くのか？ 病気になるのか？ けがはし

ないのか？ 不吉なことが起こるのか、はたまた良いことが起こるのか？ と、不安に思っていることの見通しを示してくれているように思えます。

でも、そのからくりを見ますと、不安に不安を足しているのに過ぎないことが、すぐわかります。

もし占いをして、上手く行くから大丈夫と言われれば、怠惰になって、思ってもみなかった新たな不安な状態を作り出してしまうかもしれません。

それに、大丈夫という時期が過ぎれば、また不安に駆られます。

もし上手く行かないと言われれば、不安なところ、さらに不安に駆られるか、その不安を取り除くことに前のめりになって、する必要のないものにまで手を出してしまい、これまた新たな不安に陥るかもしれません。

結局占いは、どこまで行っても占いに過ぎず、不安を取り除く根本的な手段には成り得ません。

取り除けないどころか、不安という渦に絡め捕られて行くだけです。

そこには、真の内なる霊的成長や品性は、これっぽっちもありません。

私たちの人生にあって、上手く行く上手く行かないは、根本的な問題ではなく、上手く行こうが行くまいが、そこに神の御手を見出すことができるのか、そして霊的成長や品性が伴うのかが、根本的な問題です。

もし、上手く行こうが行くまいが、そこに神の御手を見出すことが出来るならば、順境の日には幸いを味わえ、逆境の日にはよく考えることが出来ます。

世で言うスピリチャルなんたらかんたらみたいなものを含めた、上手く行く上手く行かないというものさしだけで押し量るすべてのものは、私たち人間を翻弄するだけです。

上手く行く行かないということこそが現実だと、私たちは迫られますが、もしそこに主イエスという現実で実体なるお方を認めることが出来ないならば、非現実世界を現実であるかのように思わされているだけです。

そこには、いつまでも残る実態のようなものはありません。

Conclusion

伝道者の書の著者ソロモンは、その生涯に渡って、神の知恵とキリストの霊が離れることはありませんでしたが、そのソロモンが言います。

順境も逆境も、全部、神の御業である。

真っすぐに思われる時も、曲がっていると思われる時も、全部神の御手の中
なることであり、

人の生き方において重要なのは、すべての物事に神の御業を見出し、味わえる
時には味わい、考える時には考えなさいと言います。

言い換えますと、

楽しみを持続させる人生でもなく、苦しみを除くための人生でもなく、苦しい
時は苦しみ、楽しい時は楽しむ人生です。

比較して人を裁く必要もなければ、自分を不必要に傷つける必要もない。

ただ有るのは、今という時の積み重ねが、主イエス様と顔と顔を合わせてお
会いした時、すべてのことが益だったと言える祝福です。

私たちキリスト者の人生は、順境になびき、逆境に潰される人生ではありません。
ん。

もうすでに、約束されている神の国に、新しい天と新しい地に入ることが確定
している人生です。

この確定は揺るぎもせず、取り除かれもせず、消えることもありません。

行き着く最高のゴールが変わることのない人生です。

そこに行きつく過程は、順境もあり、逆境もありますが、味わい、よく考える
ことが出来、また、それすべて、私たちに必要なものなのでしょう。

だから、今年1年も、これもあれも神のなさることだと、祈りと御言葉と礼拝
をもって、与えられるすべてのものを味わい、考えながら、進んでいきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：伝道者の書7：14